

いきもの記

Vol.183 2026.5.8

生物教員 佐藤龍平

発見難易度S級のサンショウウオを探せ！① 謎の2人組の正体とは？！

Vol.178で書いた通り、ぼくは去年の9月の文化祭で謎の中学生2人組にそそのかされ、すっかりサンショウウオ沼にハマった。でも、どれだけ探してもサンショウウオは見つからない。「あの2人にまた会えたら質問攻めにしてやる…！」と思っていたのが4月初めまでの話。じつは、4月10日にあのいきもの記(178)を書いた直後、なんと2人のうち1人に会うことができた。そう、うちの高校に入学していたのだ。こうして感動の再会(?)をしたソウスケと、積もる話を(一方的に)して、衝撃の事実を知った。ぼくがソウスケたちに教えてもらったポイントに冬に1人でいった時、人の背より高い滝に行き当たった。ポイントはこの先を示していたが、「さすがに中学生がこんなところ登れる訳がない」と思い(事実、足をかける場所が無くてどんなに頑張ってもぼくは登れなかった)、諦めた。改めて聞いたら、ソウスケたちは「その先に行った」と言うのだ！「確かにあの滝はちょっと大変でしたね」とのこと。あいた口が塞がらなかった…。

さて、誰もが予想できる話の流れだと思うが、このGWに早速、サンショウウオ探しの案内をしてもらうことになった。冬に追い求めていたヒガシヒダは繁殖期が終わっているので、5月頃がシーズンのハコネサンショウウオがターゲットだ。ソウスケたちも行ったことのない新規開拓の沢を目指す。2人組のもう1人、他校に進学したソウマとも再会。ソウマは事前にいきもの記を読んでくれていて、ぼくが2人のことを探していたのを知っていたので、「文化祭ぶりですね」と意味ありげにニヤリとしてきた。これで最強のサンショウウオコンビが揃った。サンショウウオを見つけないのはもちろんなのだが、正直、「この2人についていくこと自体」にも興味があった。

いざ搜索へ。スタート直後からいきなり道を外れ、「え…そこ行くの？」という超急斜面を登り始めた。一歩進めば足が沈んで崩れ落ちるふかふかの斜面を、ずりずり滑り落ちながら登る。両手をついても掴めるものは土のみ。まるでアリジゴクに落ちるアリだ。そんなめちゃくちゃなルートで2人は後ろも振り向かず、ずんずん行ってしまふ。「ひえ～置いてかれる」と焦りながら四つん這いで必死に追いかける。沢に着いた2人の表情は、真剣そのもの。ひたすら石をひっくり返す作業を飽きもせず黙々と何時間も続ける。靴の中はとっくの昔からびしょ濡れだ。ぼくはもう何度も滑って尻餅をついた。大量のハエにもたかられる。それでも弱音を吐くのはぼくだけ。「…本当にとんでもないコンビだ。」

「いた！」という声が数時間おきに聞こえてくる。そのたび、ついにか！と色めくが、「…幼生が。」と言われてガクッと力が抜ける。いや、幼生も大事なのだ。幼生がいるという事は、その沢はハズレではない。必ず成体がいるはずなのだ。

と言いつつも、成体が全然見つからない。かれこれ6時間この作業を続けている。休憩は立ちながらおにぎりを食べた10分間だけだ。さすがにしんどい。自分だけ先に下山してしまうおうか…なんてことを考え始めて、諦めかけていた時、上の方にいる2人から「先生！！」と叫ぶ声が聞こえてきた。ついに見つけたか?!それともまた幼生か?!6時間に及ぶ大搜索の結末は、、、次号に続く。



ハコネサンショウウオを追い求め地図に無い未踏の道を突き進む2人 東京都検原村5月
ついて行くのがやっとだった。写真ではよく分からないと思うが、かなりの傾斜を登っている。高校1年生って普通、中学生味があって可愛らしいなあなんて思うけど、この2人の印象はスバリ「たくまざる野生児！」だ。



幼生を見つけた2人 「今日は先生が来てくれたから絶対見つけたいよね」と言ってくれる。なんて良い奴らなんだ！2人は福生市の中学の同級生で、サンショウウオ探しにハマっていたのだそう。ソウスケは魚の、ソウマはカニの研究者になりたいとのこと(サンショウウオじゃないのかーい！)。



ハコネサンショウウオの幼生

幼生は2~3年ほど渓流の水中で過ごし、上陸して成体になる。そして繁殖期に沢に戻る。成体を探す場合、この繁殖期を狙うしかない。幼生は指の先には黒い爪がある。流水性のサンショウウオなので流されないようにこの爪でしがみつくだらうか。

後肢拡大